



The Excursions of
Mr. Brouček
VOL. 3

旅行にゆせて ブラウチェク氏の

ペトル・ホリー
チェコ共和国大使館一等書記官／チェコセンター所長
Petr Holy

過日、訳あって私は戦前や戦後に日本で活躍したチェコ出身の建築家たちの足跡を目指し、祖国から遙かなる地で彼らが残した由緒正しき建築を訪ね回っていた。今や意外に知られていないことだが、チェコ人建築家が日本で竣工させた建物が割とたくさんあり、現在も残っている。日本の各地で多発する「再開発」を不幸中の幸いともいうべく、逃れた建築物を旅すると、百年前、いや、数十年前の先人が有する洗練された、いかにも高貴なセンスに心を奪われる日々だった。日本を拠点としたチェコ出身の建築士はなんと四、五人もいた。その一人、日本の近代建築に大いに貢献したアントニン・レーモンド(1888~1976)が群馬県高崎市の文化振興に著しく貢献した井上房一郎(1898~1993)の邸宅を1952(昭和27)年に設計した。その井上邸をこの間初めて訪ねた。レーモンドによる見事な建築風に同ノエミ婦人による家具や調度品、同じくチェコで生まれた建築家アドルフ・ロースが進められた「ラウムプラン」を考慮して作られたかのような和室にイサムノグチによる提灯証明が当時のまま掛けられ、その床の間に次の書が飾られていた。障子紙を微かに照らす木漏れ日に、「**藝**といふものは實と虚との**皮膜**の間にありて面白し」という文句に気がついた。これは、本来ならかの有名な近松門左衛門が輩出した『難波土産』において唱えた「虚実皮膜論」であろう。藝というものは、事実と嘘との紙一重の間にあるものだ、という意味を成し、その書の作家は更に「面白し」という言葉を添えた。古い佇まいを殆ど残していない日本、いや、東京に住むと、上述したような異空間に投げ入れられ、その鴨居の下をくぐり抜ける瞬間は、まるでブラウチェク氏が見た夢のような気分を味わうことができる。それに、これはプラハ城の、プラハっ子ならおそらく誰もが知っているだろう老舗酒場ヴィカールカ(今は常連客より、むしろ建築の宝庫古都プラハを短時間で観察しようとする観光旅行者で賑わうレストランになっているのだが)で泥酔になる必要もなければ、ブラウチェク氏のような打算的な気質の持ち主である前提も必要でないのだから。マチェイ・ブラウチェク(ブラウチェクとはチェコ語で小さな虫という意味をもつ名字である)という登場人物は、いつぞやヨーロッパの文化的な中心としてその誇らしげな顔を見せた古都プラハに住む、19世紀後半の出っ腹の町人であった。原作者スヴァトプルク・チェフ(1846~1908)は更にこの「虚」のチェコ人を様式化させ、更に描写している。賃貸アパートの建物の傲慢な大家で、これといった職業につく必要もなく、毎日の糧をもらう家賃で得る。有り余った暇をプラハの老舗料亭に通っての、グルメとかのチェコビールの異常な愛飲家として過ごし、彼の**かたぎ**の気質に似る仲間と空の雑談をする性格を持つ。一方は卑怯者、偽善者、破廉恥な振る舞いをみせる日和見主義者、これ全てはチェフが描いたブラウチェク氏である。つまり、アンチヒーロー、反英雄なのである。19世紀後半のチェコ、いやボヘミアは、当時、オーストリー・ハンガリー帝国の属国であり、またチェコは工業の先進地域であった。技術者を多く世に送り出した国でもあった。しかし、同時に17

世紀から続いていたハプスブルグ家による支配はチェコ人の多くに好まれることなく、国中に反ハプスブルグ的な雰囲気も漂っていたことは言うまでもない。多国の影響から我が身を守りたい、せっかくあるチェコ語を公用語として使いたい、何世代にわたり続いていた属国制度から解放したいというようなことから誕生した国粋主義、愛国、ある意味ではナショナリズムの気配を感じる事が多くあったはずだ。国のため、世のため、少しでも役に立ちたいというのは当時の習わしだったと言われている。しかし、ブラウチェク氏はこれとは無関係の人物だったようだ。作家チェフはこうしたブラウチェク氏を風刺的に、チェコ人が好んで使う皮肉をたっぷり振り掛けて描くのである。月は朧にブラウチェク氏は微酔いに、まるで「夢遊」であるかのように摩訶不思議な旅に出かけることはどうも彼の癖であった。彼の「国のため」といったたくいのエスニック意識は無に等しかった。しかし、現実の時間から外れ、瞬時に未来、気がつく過去に移動することを可能とする夢またその夢の世界に誘われ、どこか**ほら**ミュンヒハウゼン(1720~1797)作の『法螺吹き男爵』を思わせる。妖艶な月光にさそわれたブラウチェク氏は正に、江戸川乱歩の名句「うつし世は夢、夜の夢こそまこと」のように振

る舞ったといえよう。もしやブラウチェク氏は乱歩の言葉を聞いたのなら、さぞかし喜んだことだろう。チェコの文学や文化において、「典型的なチェコ人」はたびたび登場する。なお、小生は生まれも育ちもチェコなので、客観的に見るのはややもすれば困難に終わってしまうだろうと思うが、こうした様式化された登場人物は他にもある。『善良なる兵士シュヴェイクの運命』(ヤロスラフ・ハシエク著、1923年刊)の主人公、シュヴェイク二等兵は愚鈍と思われがちだが、戦争は馬鹿だという反戦的な、健全な理性を持つことで今もなお愛されており、日本語を含む無数の外国語に翻訳されている。シュヴェイク兵士もまた、ビールの愛飲家なのだ。プラハの老舗ビアホールであるウ・カリハに毎晩通い、酔っぱらいの話に耽るのだった。また、チェコ出身映画監督ミロス・フォアマン(チェコ語読みはミロシュ・フォルマン、1932年生まれ)などの1960年代のチェコ「ヌーヴェル・ヴァーグ」の映画や、近年はヤン・フジェバイク監督(1967年生まれ)のアカデミー外国語映画賞の候補までなった映画「この素晴らしき世界」(2000年)にも、その都度の環境状況にうまく入り込む、日和見主義的な「隣人」の男が登場する。チェコの文化は長い年月、常に回りを気にして**かたど**って来た。暗黒な時代も多々あったにせよ、チェコ人はそれを特有なユーモア、いや、ブラックユーモア、言い換えれば良い意味での攻撃的なアイロニーで生き抜くことができた。かえって、ユーモアと常なる諷刺がなければ、チェコという国はとっくに滅びていたかもしれない。一見は複雑な内容の作品でも、その行間をちゃんと読めば、笑みを浮かべさせる方が多いのでは、と確信している。その道を今開いてくれるのは、ブラウチェク氏である。



プラハの街並み